

小学校外国語活動における「読む」ことへの 第一歩としての絵本の活用

Using Picture Books as the First Step Toward Reading in Foreign Language Activities at Elementary Schools

畑江 美佳
HATAE Mika

Abstract: “Foreign Language Activities” has been conducted as a required subject for 5th and 6th graders in Japan since 2011. The overall objective is to form the foundation of pupils’ communication abilities across foreign languages and cultures. In the handling of the content, it says that teachers should focus on the foreign language phonetics, but they should use letters of the alphabet and written words as supplementary tools for only oral communication. The statistics, however, show that many students in junior high schools tend to feel weak in English reading and writing skills and their motivation to study English declines sharply after their first 7th grade summer vacation. Although the curriculum at junior high schools should be designed in an appropriate manner with due heed paid to the connection with Foreign Language Activities at elementary schools, the connection between them seems inadequate. To solve this problem, this paper discusses the appropriate time and way to start reading English focusing on reading ability especially for 10, 11, and 12 year-old pupils, and considers the use of English picture books in Foreign Language Activities as the first step toward reading.

Keywords: Foreign Language Activities, Reading Skill, Communication, Picture Books, Intercultural Understanding, 小学校外国語活動, 「読む」技能, コミュニケーション, 英語絵本, 他文化理解,

1. はじめに

平成 14 年度から小学校の「総合的な学習の時間」の中で国際理解に関する学習の一環として英語活動が始まった。平成 22 年度には、5 年生及び 6 年生で英語活動を実施した小学校は 98.7%に上り、¹ 平成 23 年度から外国語活動は小学 5・6 年生で週 1 回の必修となっ

た。² 活動の内容は、音声を中心として主にコミュニケーションを育む体験的なものが中心となっている。外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。³ 外国語活動には、「読む」「書く」ことを目標とした活動は含まれず、算数や国語のような教科としての扱いではないためテストによる評価は行わず、あくまでも、コミュニケーション能力の素地作りのために音声を中心とした体験的な活動にするように示されている。

ベネッセ教育研究開発センター(2009)の調査によると、小学校の英語活動について、約7割の中学生が「内容が簡単だった」、「楽しかった」と感じている。しかし、中学1年の夏休み後には既に英語を苦手と感じるようになる生徒が出てくる。また、中学生の英語の学習動機には、「勉強しなければならないから」、「テストでいい点を取りたいから」、「できるだけ良い高校や大学に入りたいから」などが挙げられる。⁴ 小学校で生き生きとした英語コミュニケーション活動を経験してきた子どもたちが、中学生になると、英語を学習する目的や意義を見失ってしまっている。

本稿では、小学生及び中学生の意識調査をもとに、小学校外国語活動で「絵本」を活用することによって、言語や文化への興味関心を引き出し無理なく英語の文字に触れさせることで、中学生の英語への動機付けを高めるような英語カリキュラムを検討したい。

2. 中学生の英語学習意欲の実態

中学生の「最もやる気が高かった時期」は中1の始め頃だが(43.6%)、それも中1の夏休み後には急降下する(3.8%)。また、「英語を苦手と感じるようになった時期」は中1の後半が最も高い(26.6%)。つまり、中学入学時の英語学習への「やる気」は、半年後には「苦手意識」に取って代わる。⁵

中学校教員 3,643 名を対象にした「中学校英語に関する基本調査」によると、生徒のつまづきの原因の上位には、単語（発音・綴り・意味）を覚えるのが苦手なこと(68.6%)、英語に限らず学習習慣がないこと(68.0%)、英語に限らず学習への意欲がないこと(61.0%)、英語の文や文章を書くことが苦手なこと(58.3%)、英語の文字や文章を読めない（文字から音にうまく変換できない）こと(50.2%)が挙げられている。⁶ 泉(2011)は、小学校でのコミュニケーション重視の活動から、中学校での主に筆記テストによって評価されることへの転換がうまくいっていないことが考えられるという。外国語活動で体験を中心に楽しく英語に触れてきた児童が、突然テストで能力を問われるようになるところに大きな試練があるという。⁷ 中学校では、音声と共に「読む」「書く」ことも早急に求められ、テストによって評価さ

れるということが、生徒のやる気を奪い、苦手意識を持たせることに大きく影響しているようである。

3. 小学生の認知発達に伴う興味関心の移行

文部科学省(2009b)の調査によると、「英語の授業は好き、どちらかと言えば好き」「英語の授業に進んで参加している」と答えている児童は学年が上がるにつれて減少している(図3-1,2)。これは、中学校入学後に起こる英語に対する学習意欲低下の兆候が、小学校高学年から既に始まっていることを示している。⁸ さらに、「英語の授業で楽しいと思うこと」を活動内容別に回答した結果から、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の割合を合算し、学年別に分類した(図3-3~6)。⁹

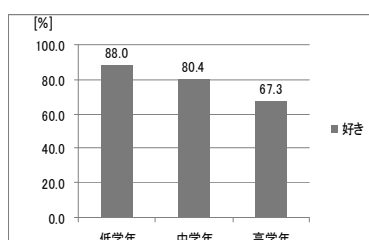


図 3-1 英語の授業は好きか

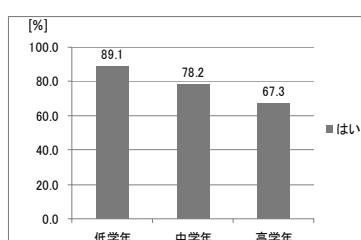


図 3-2 「進んで参加しているか」

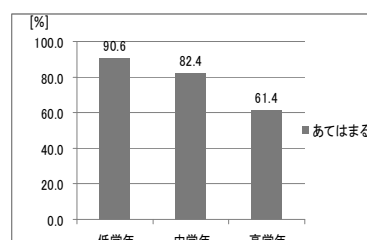


図 3-3 英語の歌を歌うこと

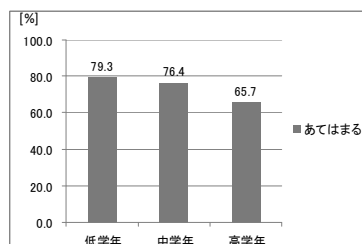


図 3-4 英語で友達と会話すること

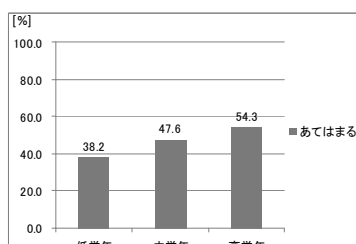


図 3-5 英語の文字や単語を読むこと

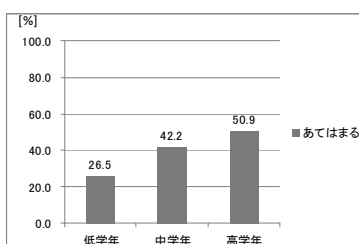


図 3-6 英語の文字や単語を書くこと

調査結果から高学年になるにつれて児童の「楽しい」と思うことに変化が現れる。「英語の歌を歌うこと」、「英語で友達と会話すること」は徐々に下降していく。一方、「英語の文字や単語を読むこと」、「英語の文字や単語を書くこと」は逆に上昇していく。ピアジェの思考発達段階説によると、低学年は、ごっこ遊びなどによる自然な言語習得能力が旺盛な「前操作期」、中学年は、数や量の保存概念、可逆的操作も行える「具体的操作期」、高学年は、形式的、抽象的操作が可能になる「形式的操作期」にあたる。チョムスキーによる母語獲得理論では、人には生まれながらにして「言語獲得装置(Language Acquisition

Device=LAD)」が備わっており、母語の獲得が終わるとその能力は低下するという。レネバーグは、言語習得には12歳頃に「臨界期(critical period)」がある(「敏感期(sensitive period)」と呼ぶこともある)とする。小学5・6年生の中には、声を出すことに恥ずかしさを覚えたり、聞いた音をそのまま繰り返したりすることを苦手と感じる子どもが出てくる。また、英語の読み方に興味をもち先生に尋ねたりする子どももいる。小学校の長い6年間に起こる児童の認知発達に伴うこれらの興味関心の移行を見逃してはならない。

畑江(2011b)は、生得的な言語獲得を可能にする LAD と、ものごとを論理的に思考し言語習得することができるようになるメタ言語能力(metalinguistic awareness)の機能がクロスする時期が、小学校高学年あたりであるために、この時期に児童の興味関心の移行が起こると考え(図3-7)、無意識的な言語獲得能力の低下の始まりと、意識的な言語習得能力の上昇に合わせて、その時期に最も適切な指導を行うことが必要であるとした。¹⁰ よって、「小学生への負担」に配慮して『文字指導は中学生からでよい』という既成概念に囚われず、「高学年児童の認知発達」に合わせた文字の導入を小学校から始めることに考え方を切り替え、その有効な方法を探り、検討を重ねることのほうが重要であると考えます。問題はその方法にある。中学校のように、短時間で詰め込む方法を小学校に下ろしてくるようでは、もちろん英語嫌いを増やすだけであろう。

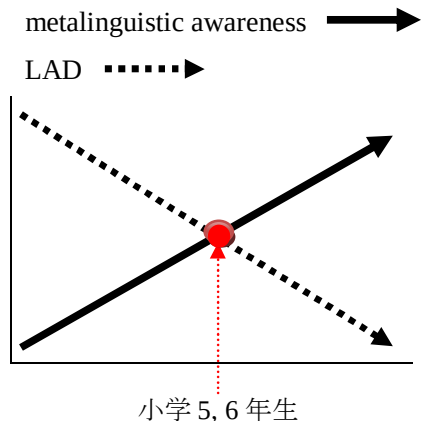


図3-7 年齢に伴う LAD と metalinguistic awareness 機能の相関 (畑江 2011b)

4. 小学校と中学校の英語カリキュラムの接続について

小学校学習指導要領では、文字や単語の取扱いについては「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」とされている。¹¹ 小学5・6年生に外国語活動が必修となった今、多くの公立小学校では文科省認定の『Hi! friends!』をテキストとして使用している。¹² この中では、5年生でアルファベットの大文字、6年生で小文字が導入されている。テキストの中には絵に単語の綴りが添えられて

いるものもあるが、どの程度まで「補助的に」文字を扱うかについては、それぞれの小学校や校区に委ねられている。よって、小学校では統一された文字指導が行われているわけではない。一方、中学校学習指導要領では「読む」「書く」技能はアルファベットを含めて中学校で学習することになっている。¹³ 小学校では、アルファベットや単語などの文字の扱いについては、他のコミュニケーション活動のように積極的に語られることもなく、曖昧なままやり過ごされている状態である。

平成24年度施行の中学校学習指導要領（外国語）によって、英語の授業時間が週3回から週4回に増加され、小学校で育まれた「聞く」「話す」コミュニケーションの素地を踏まえ、「読む」「書く」を加えた4技能を扱うことが明確にされた。特に「読む」「書く」に関しては、アルファベットや発音と綴りの関係を含めて、中学校で扱うものとして明言されている。¹⁴ この新学習指導要領に則った中学1年生の教科書には、大文字・小文字をABC順に線でたどらせる迷路や、大文字と同じ小文字を線で繋ぐページがある。続いてアルファベットの大文字、小文字の書き方も中学での指導内容に含まれ、同時にフォニックスのような音声と綴りとの関連を表にまとめたページもある。¹⁵ 母語であれば、幼児の習得レベルであろうアルファベットの大文字・小文字の識別などが、思春期を迎えた中学生の認知発達に相応しい内容であるかどうかとも問題であるが、これら初期の文字指導が中学1年生の4月に始められ、数時間の学習を経て、夏休み前には英語を読み書きできなければ点数のとれない定期試験を経験させることが、中学生の大きな負担となっていることは明らかである。

中学1年の学習内容量と時間的制約の中では、音と文字との関連についてじっくりと習得させる余裕がないのが現状である。中学校で「読む」「書く」技能を1からスタートしようとしているために、そのひずみが生徒に影響を与えていると思われる。そのため、音声指導を続けてきた小学校英語活動のメリットを十分生かすこともできず、「英語が読めない」生徒を増やし、さらには学習意欲の低下や苦手意識をも引き起こしている。しかし、『音声指導は小学校で、文字指導は中学校で』という隔たりがある限り、そのひずみを正すことはできないだろう。文字指導は小学校でしてはならないとする理由が、「児童の学習負担になる」ということであるならば、文字指導をアルファベットも含めて全て中学校からとすることが、「中学生の学習負担になる」という発想にはならないのだろうか。

金森(2007)は、子どもの発達段階や確保できる授業時数などさまざまな条件を考えつつ、音声中心の指導から、どのように、いつ読み書きの指導を導入するのかについて、中学校までの一貫したカリキュラム作りを前提に検討する必要があるとし、児童期における第二言語習得のプロセスを踏まえた効果的な指導方法についても、さらなる研究を進めていくことが望まれると述べる。¹⁶ 畑江(2005)の調査では、低学年(1～3年生)と、高学年(4～6

年生)の文字認知の傾向には違いがみられた。綴りの添えてある絵カードを使った 30 単語の発話練習を経て行った「綴り字」のみを提示して読ませるテストでは、事前と事後テストにおいて低学年で有意差の現れた単語は単音節を 3 つ含む 4 単語であったが、高学年では、音節数や単語の長短に拘わらず 20 単語に有意差があった。¹⁷ 高学年には、英語を固まりとして認知できる能力が育っていると考えられる。そこで、小学 5・6 年生にとって文字のない環境での英語活動が本当に相応しいのかどうか疑問が生じる。自然な言語獲得能力が低下してくる時期に、音声のみのインプットが彼らの不安を助長することにもなり得、さらには読める能力を伸ばす機会を奪っているとも考えられる。リヴァース(1987)は、口頭による導入と、既習のものの文字による提示との間に時間的な間隔をあまり長く置くと、発音とイントネーションに低下がみられたり、音を不正確にメモして覚えてしまったりすることを指摘する。¹⁸ 高学年児童の、「読みたい」「書きたい」という意欲を抑えつけるのではなく、芽生えた欲求をうまく拾い上げそれを満たし将来へ繋げていくことが、中学以降の英語学習への動機付けとなるのではないだろうか。また、その時機を逃してしまうことによって、「音声」と「文字」との乖離が進み、自然な読み方ができなくなってしまう危惧も生じることになる。

近年、校区や市町村単位で行われている「小・中連携」に向けた取り組みとは、お互いの授業参観や中学校教員による小学校英語活動指導などが主である。しかし、「小・中連携」で本当に連携しなければいけないのは、長いスパンで見通した英語カリキュラムであると考えられる。特に、「読む」技能に関しては、「小学生には負担となる」という現在の認識から「小学校から少しずつ導入していくことが適切である」という新しい認識のもと、高学年から「読む」ことも含めたカリキュラムを構築し中学校への橋渡しを図ることが、子どもの学習意欲と能力を伸ばすスムーズな連携と呼べるのではないだろうか(図 4)。

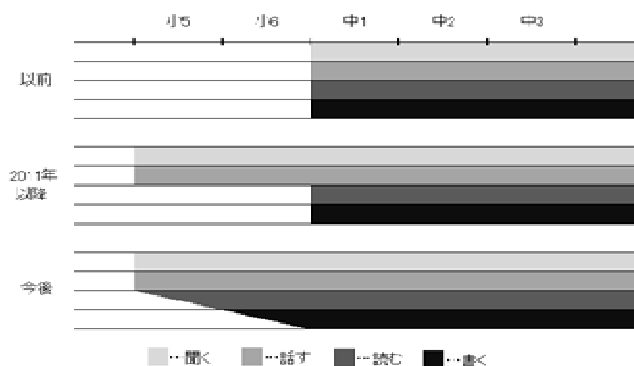


図 4 4 技能の取扱い時期についての提案 (畑江 2011b)

5. 他文化理解を通しての動機付け

英語活動において、低学年からできる「読む」ことへの気づきとして相応しい方法はないだろうか。低学年では、歌やゲームを通してアルファベットの文字に慣れさせること、中学年からは、ピクチャーカードの下に英語の綴りが印刷してあるものを自然に目に触れさせること、学校内の掲示物を日本語と英語で表記することなどが挙げられる。本稿では、これらと共に、「読む」ことの有効な導入方法として、「絵本」の活用を考えたい。

絵本の読み聞かせは、母語の発達においても重要であり、言葉のみならず子どもの成長に大きな役割を持つと言われている。余郷(2010)は、絵本の読み聞かせで目指すものは、「自分自身の命を愛し、他者の命を愛するという心の状態」であると述べる。¹⁹ そして、絵本の読み聞かせは、子供の聞く力を引き出し、言語発達や社会性の獲得に効果があり、ことばと大人への信頼を回復し、テレビやゲームの誘惑に負けない人間的な力をつけるために必須のものであるという。²⁰ 現在、小学校では絵本の読み聞かせが活発に行われ始めている。英語活動においても、絵本の持つ豊かな表現力や文化的背景も含めたコンテキストのある場所での「読み聞かせ」は、英語を「読む」ことへの第一歩としても相応しい教材となり得ると思われる。

教材として英語の絵本を使う基本的な考え方として、外山(2010)は、次の 6 項目を挙げる。²¹

- ・文脈の中で英語を固まりで習得する
- ・達成感を味わい、次の学習への動機を持つ
- ・自然な繰り返しに多く触れる
- ・予測する力を養う
- ・他教科とのリンクで、英語は身近なものであることを知る
- ・伝承歌を通して英語圏の文化に触れる

「絵本」を読むことで英語を固まりで習得することができ、自然な繰り返しによって意味を伴う読み方が身につく。そして、トップダウン式に、絵を見て意味を把握しながら英文を聞き、予測したり理解したりするようになる。また、絵本のトピックや言語材料は生活のさまざまな部分にリンクしており、絵本の中に描かれている英語圏の文化に興味を持ち、高学年では英語を読んで理解できた達成感から、さらに読んでみたいという動機付けとなる。

また、学習指導要領の内容のうち、「言語や文化に関する事項」には、具体的に「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づくこと」、「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと」、「異なる文化をもつ人々との交流などを体験し、文

化等に対する理解を深めること」が挙げられている。²² しかし、『Hi, friends!』の中に「言語や文化に関する事項」が十分に取り扱われているとは言い難い。活動の中には、よく目にする外来語とその正しい発音について取り扱ったり、様々な国の挨拶を聞いて言葉の面白さに気づかせたりする活動があるが、内容的にも量的にも不十分である。他言語や他文化との体験的な活動が日常的にできることは理想であるが、地域によっては他文化に触れる機会が少ないところもある。その点、絵本には様々な国の生活の様子や、日本にはない文化、見たことのない食べ物や道具などが扱われているものが多い。内容も子どもの実態に合ったものが多く興味深い。外山(2010)は、絵本の選択次第で、子供を過去の世界にも、外国にも、または宇宙までも連れて行って疑似体験させることができるとする。さらに英語活動を言語習得だけに焦点を当てるのではなく、国際理解にリンクさせ、楽しく豊かな時間にできるとも述べる。絵本の適切な選本や、それを活用する教員の知識と指導力が備わっていれば、学習指導要領の目標及び内容にも合致した教育を施すことができるといえる。

6. 「読む」ための絵本の活用方法

リーパー(2011)は、「伝えたい」「わかりたい」という気持ちがなければ生きた英語を学ぶことはできないと述べ、伝えたいという強い気持ちのもとに書かれ、多くの人の心を動かしてきた名作絵本は、まさに「生きた英語」であり、子どもの心に強く響いて子どもの世界を豊かに広げ、読み聞かせは子どもたちのコミュニケーション能力を高めるといえる。²³ 絵本のストーリー性は、単なる反復ドリルではなく意味のある活動を可能にする。英語活動で絵本を利用することは、「話の内容を理解したい。友達と共有したい」といった児童の英語活動への態度を能動的にし、積極的にコミュニケーションを楽しむ姿勢を育むと言えよう。また、何度も繰り返しても飽きさせない魅力があるため、学習指導要領における目標の「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことにも十分適応する。

太田(2012)は、外国語活動において、「あいまいさに耐えながら聞き続けて理解しようとする資質(ambiguity tolerance disposition)」と「まちがうことを恐れずに表現してみようとする資質(risk-taking disposition)」を育てていくべきと述べる。²⁴ この資質は中学校、高校へと進むにつれて必要となる大切な資質と考えられる。しかし『Hi, friends!』には、まとまりのある内容をじっくりと聞かせるようなレッスンは含まれず、殆どが自己表現及びA対Bの対話表現を軸に構成されている。「あいまいさに耐えながら聞き続けて理解しようとする資質」は、「まとまりのある英語を推測しながら聞き続けて理解しようとする資質」という言葉に置き換えることもできると思われるが、いずれにしろ、この能力は、絵本の読み聞かせを継続的に体験する中でゆつくりと育まれると考えられる。

大島(2011)は、絵本を「読み聞かせ」ではなく「リードアラウド」させることを推奨する。²⁵ ただ文字面を表面的に読むのではなく、文が意味するところを語るように、自然な「感じ」を出して読むことで、表現指導であると同時に、内容理解を深めさせる手段である。本の中にある「感じ」を出す練習は、自分自身の考えを伝える力になり、後に、英語コミュニケーション能力に繋がるという。大島は、子どもに「なぞり読み」をさせる。ひらがなやカタカナのように1字が1音節を表す音節文字を使う日本語と違い、英語は1字が1音素あるいは1単音を表す音素文字を使う。つまり、英語はひとかたまりでの読み方を知らなければ読めない。よって、「リードアラウド」による「なぞり読み」は、なぞった文字を一連のかたまりとして認識させ、そのかたまりである単語と、それに固有の読みを頭の中で一致させ、「解説」できるようにする効果的な方法であるという。心地よいリズムに乗って無理なく暗唱できるほどの量であれば、高学年では、同時に「なぞり読み」することで音声と意味を伴った自然な「読み」のインプットになる。きれいな絵本の楽しい内容を、友達と声を出して感情豊かに読みあげることができたら、児童の心に共鳴する大きな自信となろう。

同様に、田縁(2010)は、高学年には、まず音だけで聞かせて内容を想像させ、次に音を聞きながら絵本の文字を読ませ、さらにはCDと一緒に「同時読み」をしたりシャドーイングをする活動を行っている。²⁶ これらの「なぞり読み」や「同時読み」は、「音声」と「意味」と「文字」との三位一体のインプットに繋がる。皆で声を合わせコミュニケーションを図りながら絵本を読むことは、機械的な反復練習と違い、何度繰り返しても楽しい活動になる。英語と書記体系の違う日本語を母語に持つ日本人が、英語表記の特性に馴染むためには、インプットの量も時間も大量に必要である。小学生のうちからできる、絵本を繰り返し読む活動を通して、英語の表現にも文字にも自然に慣れ親しませることができる。

7. 結論

小学校外国語活動の中で、「読む」ことの第一歩として絵本を活用することが、中学校での早急な読み書き指導を緩和するための理由のみならず、高学年児童の認知発達に沿った適切な時期の適切な活動であるとして、積極的な導入の在り方を論じてきた。しかしながら、効果的に活用するためには注意も必要である。以下に絵本導入の際の注意点をまとめる。

1. 絵本の選本：絵や音声で内容が推測しやすいもの、音読して繰り返しやリズムが心地よいものを選ぶ。また、外国の文化や生活を扱った絵本を用いて広い世界に目を向けるきっかけを与える。使用絵本には既習の単語や表現を半分くらい含むことで、児童に安

心感を与え、推測を容易にする。

2. 絵本の提示：クラス全体に見えるように、大型絵本、または書画カメラやスキャナーで取り込んでスクリーンに映し出し、児童全員が一体となって絵本の世界を共有できるようにする。毎回の活動の一部として同じ絵本を繰り返し使うことで、自然な表現が無理なく身につく。
3. 絵本の指導法：最初は教員またはCDによる「読み聞かせ」、慣れてきたら全体で「読み合い」をする。次に、一人一人に絵本を与え「なぞり読み」をさせる。自分の読んでいる箇所を指で追いながら、感情のこもった読み方をするように促す。最後に、グループやペアになって「一人読み」をさせ、「理解しながら気持ちを込めて読めた」という達成感を与える。

最後に、将来的に低学年から段階的にできる「絵本」の指導法を提案したい（表7）。言語獲得能力が高い低学年から、自然に文字に触れさせる環境を与えることで、「音声」と「意味」と「文字」とが三位一体となった大量のインプットが可能になる。学習段階や学習内容に合った絵本を選び、低学年では英語の自然なリズムや表現を音声中心に「読み聞かせ」、中学年では感情をこめて全員で音声中心に「読み合い」、高学年では「音声・意味・文字」を同時に提示しながら「なぞり読み」をする。そして、中学1年では、教科書等を、音声と意味理解を伴った読み方で「一人読み」できるようにする。このトップダウン方式による無理のない導入を経て、中学生の英語を「読む」ことへの抵抗を減らすことができると考える。小学校からの継続的な絵本活用によって「読む」技能の素地を作り、中学校の英語学習に円滑に繋げていくことが、中学生の英語への前向きな動機付けとなることを期待する。

表7 学習段階における絵本を活用した指導法

学習段階	指導内容	指導の目標
低学年	読み聞かせ	音声や絵によって推測しながら内容を理解できる。
↓	+	
中学年	読み合い	内容を理解しながら感情のこもった英語で表現できる。
↓	+	
高学年	なぞり読み	音声・意味・文字を結び付け内容を理解しながら音読できる。
↓	+	
中1	一人読み	内容を理解しながら英語を音読・黙読することができる。

8. 今後の課題

絵本を用いて「読む」ことの第一歩を小学生からスタートさせる意義と方法を検討してきたが、今後、小学校で絵本の活用を広めていくためには、「いつ、何を、どのくらい、ど

のように」与えるかが鍵となる。学年ごとの適切な絵本の選本、読み方や指導法の研修、そして、指導者側に、小学校外国語活動が中学、高校へと繋がっていくのだという認識と使命があってこそ、子どもたちの将来の英語力、国際力に結びついていくと思われる。今後は、小・中英語カリキュラムに具体的な絵本活用を位置付け、小学校、中学校での段階的な実践を通してその効果を立証したい。

〈謝辞〉本研究は平成 22 - 24 年度科学研究費基盤 (C) (22520640) の補助を受けた。

註

- 1 文部科学省. 2009a. 「平成 21 年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査 (C 票) の結果について」.
- 2 本稿では、平成 23 年度より小学 5・6 年生で必修となった活動を「外国語活動」とし、小学校低学年からの活動を「英語活動」とする。
- 3 文部科学省. 2008a. 「小学校学習指導要領 第 4 章外国語活動」. 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. 東洋館出版社. pp.34-35.
- 4 ベネッセ教育研究開発センター. 2009. 「第 1 回中学校英語に関する基本調査[生徒調査]」.
- 5 畑江美佳. 2011a. 「英語を『読む』技能習得のための小・中連携—小学校からできる文字指導、中学校へ繋げる文字指導—」. 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』. 第 12 号. pp.121-132.
- 6 ベネッセ教育研究開発センター. 2008. 「第 1 回中学校英語に関する基本調査[教員調査]」.
- 7 泉恵美子. 萬屋隆一他編著. 2011. 「外国語活動では、評価はどのようにしていますか?」. 『小・中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』. 開隆堂. pp.38-39
- 8 ibid. 畑江. 2011a.
- 9 文部科学省. 2009b. 「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査 [児童用]」.
- 10 畑江美佳. 2011b. 「『聞く』『読む』技能の初期導入に関する研究—小学校高学年からの『読む』技能への素地作り—」. 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』. 第 12 号. pp.31-40.
- 11 ibid., 文部科学省. 2008a.
- 12 文部科学省. 2012. 『Hi, friends! 1, 2』. 東京書籍.
- 13 文部科学省. 2008b. 「中学校学習指導要領 第 2 章第 9 節外国語科」『中学校学習指導要領解説 外国語編』. 開隆堂出版株式会社. pp.36-37.
- 14 ibid., 文部科学省. 2008b.
- 15 文部科学省. 2012. 『SUNSHINE English Course 1』. 開隆堂.
- 16 金森強. 岡秀夫 金森強編著. 2007. 「第 2 章 小学校における英語導入の背景と現状、課題」. 『小学校英語教育の進め方—「ことばの教育として」—』. 成美堂. pp.16-21.
- 17 畑江美佳. 2005. 「単語レベルでの『読み』の特徴に関する研究—学年差と習得率に着

目してー」.『小学校英語教育学会紀要』. 第 6 号. pp.55-60.

¹⁸ リヴァース, ウィルガ・M.『外国語習得のスキルーその教え方』. 研究社出版.
pp.240-246.

¹⁹ 余郷裕次. 2010.『絵本のひみつ』. 徳島新聞社. pp.4-5.

²⁰ ibid. 余郷. pp.36-37.

²¹ 外山節子. 2010.『英語の絵本活用マニュアル』. コスモピア. pp.21-22.

²² ibid., 文部科学省. 2008.

²³ リーパー・すみ子. 2011.『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』. 径書房.
p.11.

²⁴ 太田光春. 岡秀夫 金森強編著. 2012.「第 4 章 英語教育全体における小学校外国語活動の役割」.『小学校外国語活動の進め方ー「ことばの教育」としてー』. 成美堂. pp.32-37.

²⁵ 大島英美. 2011.『声に出して読む英語絵本 初めてのリードアラウド』. 中央公論社.
pp.38-54.

²⁶ 田縁眞弓. 外山節子監修. 2010.「音源は次のステップへ背中を押してくれる大きな力」.
『音のある英語絵本ガイド』. コスモピア. p.25.